

## 第16回〈3.11以降〉読書会ロングレポート

これまでの読書会の振り返りをする段階でも確認したとおり、今回の課題本（の第5章、第6章）を読み解く過程で著者の主張として少なくとも以下のものを押さえることができました。

- 現代の日本では、民主政治に対する“正統性”（＝みんなが納得している度合い）が低下しており、「民主主義の危機」が叫ばれていること。
- 正統性を高め、代議制の民主主義を再活性化するためには「われわれ」で代表を選んだという感覚、選ばれた者が「われわれ」の代表であるという感覚を人々が持つことが重要であること。
- そのためにはそもそも「われわれ」というまとまりがなくてはならないが、戦後の工業化社会やそれ以前の社会にあったような、自然と「われわれ」を形成する枠組み（「武士」や「農民」、「ホワイトカラー」や「主婦」など）はもはや機能しない。したがって何もしなければ「われわれ」が形成されないどころか、解体されるしかない。
- 対話やエンパワーメント、自発的結社の活用等々の手段で——単に意見を政策や法案に反映させる努力をするだけでなく——能動的に「われわれ」をつくり上げる努力が必要。

以上は〈解釈フェーズ〉で確認したことです。「われわれ」ないし「みんな」をつくり上げることの重要性が見て取れます。今回の読書会最初のやりとりでもやはり「みんな」が「社会を変える」ためには重要であるという意見が出ていました。

ところで民主主義の再活性化のために「みんな」と言ったとき一体「誰」を「みんな」に含めるのかという問いがありました。日本に住む外国人や、労働力確保のために最近、積極的な受け入れが検討されている移民の人々。彼ら・彼女らを「みんな」に含めないと、民主主義とは言えないのではないかという意見があれば、しかし移民の受け入れが進んでいるヨ

ヨーロッパでは、移民とネイティブとの対立が深刻化していてそう簡単にもいかないという意見もありました。また、ここで「みんな」に含めると言うとき、それは社会保障の範囲に含めることを意味しているのか、それとも市民権を与えること、あるいは国籍を与えることを意味しているのか。少なくともこの3つを区別すべきだという意見もありました。

読書会中には言えませんでしたでしたが、必ずしも、一つの国、一つの民主政治に対して、ひとつの「みんな」が対応しなくてはならないわけでもない気が私はします。しかし「みんな」ないし「われわれ」というとき、著者は日本国民のことを念頭に置いているのではないかという意見がありました。筆者の印象では、何人かの参加者の方々がこの意見に賛成していたように思います。たとえば「他の人はどう思うか」、あるいは「本文のどこで著者がそのように考えていることが読みとれるのか」と問うことで、この意見をもう少し掘り下げたかったところですが、当日はなんとなく次の話題に進んでしまいました。

＊

そこでこの課題本全体にある問いが投げかけられました。「著者の論の中心は社会運動論にあるのか、それとも意志決定の主体にあるのか」という問いです。ある参加者の方はこの問いに対し「両方ではないか」と応答していました。つまり、社会運動論を成功させるために意志決定の主体について語っているのではないか、こういう意見だったと思います。

ではその「意志決定の主体」とは何か。国のことだろうか。なんらかの共同体のことだろうか。ある人は共同体と国が分離していることが、いま「意志決定の主体」が考えにくくなっている原因ではないかと仰っていました。あるいはそもそも「共同体」というものがイメージしにくいほど解体されてしまっていることが問題ではないかという意見もありました。

＊

ちなみに参加者の中で「自分はこうした共同体と呼べるようなものに属している」と言えるひとがいなか尋ねたところ、帰って来た答えは「家族」以外にはありませんでした。そこから、どうしてこう、“共同体”のようなものに自分が属していないのか、属しにくいのかという話になりました。「ひとびとがまとまらない原因」として考えられるものとして、読書会中に出た意見を以下に挙げておきます。

- a) 共同体に入ることによって自由を奪われたくないという気持がある。

- b) 自分で入る共同体を選べない。
- c) どうせまとまらないだろうという諦めがある。
- d) まとまったとしてもどうやって上に意見を伝えればいいのかわからない。
- e) コストパフォーマンスが悪い。

ただしここで「共同体」という言葉で念頭に置かれていたのは人によって様々でした。見分けられたものだけでも「職場の同僚」、「国」、「デモ隊」がありました。たとえば職場で、交通費が増えたのに支給されていないことを抗議する必要があったにもかかわらず、同僚同士で団結できないままずるずると来てしまった経験を語って下さった方がいました。彼女が言うには、そうして共同体に属せない（そもそも形成できない）のは、(c) や (d) にあるような理由によってです。デモの場合も、そうやってまとまったとしても結局、「うえ」に意見が伝わらないではないか、だから無意味な気がして、参加する意義を見いだせないという意見もありました。単純に何か気恥ずかしいという気持もあるようです。デモをはじめある組織で役割をこなすことに抵抗を覚えるのは「コストパフォーマンス」が悪いからだという方もいました (e) 。《組織のなかで色々と苦勞をする割に、得るところが少ない。というのも組織とは「義理と人情」の世界だが、その感覚が薄れてしまったからだろう》と仰っていました。もちろん (a) のように、共同体に入ることによって「自由」が奪われてしまうことに抵抗を覚えるという意見もありました。

＊

「デモ」という共同体に入りにくいという話から今度は、〈デモに対する疑問〉へと話題が移行しました。デモに参加しにくいのは、《デモに参加すればデモに参加している他の人々との細かい点での対立が隠されてしまうからではないか、内部にあるグラデーションが見えなくされてしまうからではないか》という意見もあれば、《ただ反対と言っているだけで代案を出していない》あるいは《デモをして声を挙げても、結局政治には何の影響も及ぼさない、意味がない》というデモそのものに向けた意見もありました。

これに対しては反論がいくつかありました。たとえばエジプトやシリアなど中東諸国で起きた革命を念頭に、《声を上げることそれ自体でなにか具体的な成果が出なくとも、そこから革命や、その後の民主化につながることもある》という意見。《これまで結果にのみ価値を求め過ぎた結果、原発事故のような惨事が起こった。過程に目を向け、それに価値を見いだすことも必要ではないか》という意見もありました。特に今回の課題本に絡めて言えば、

単にデモを起こした集団の意見を政治に反映させることだけではない、「みんな」での「盛り上がり」を作るという意味もデモにはあるはずです。

しかし「過程に価値を見いだすべき」という意見に対しては疑義が投げかけられました。たとえばマイノリティと呼ばれる人々が様々な抵抗に遭いながら運動を起こしたけれども、ただ余計に傷ついただけで何の成果も出なかったとき。このようなときにもその「過程」に本当に価値はあったと言えるのだろうか？ という意見です。

この意見に対しては《確かに、成果が出ず「経験しなければ良かった」と思うような運動の過程もありうるかもしれないが、もし十分な対話を経るなら、たとえ自らの意見が結果として通らなかったとしても、対話というその過程に意義を見いだすこともできる》という応答がありました。極端な例をとって「過程」に見出せる価値をすべて否定する必要もないという意見です。

デモに対するもう一つの疑義は、デモをするひとたちが「代案」を出していない、というものでした。ここからふたつの問いがでました。「代案はどのような媒体で伝えればいいのか？」「代案を出したり、それに基づいて集団を指揮したりするリーダーは必要ではないか？」あるいは「民主主義にとってリーダーは必要ないのではないか？」という問いです。

読書会の最後は、後者の問いについて議論が活発化しました。つまり、リーダーの必要性を巡って意見が対立し、決着がつかなかったのです。しかし議論の両サイドで念頭においていた「集団」や「リーダー」の役割にずれがあったために、議論自体も噛み合っていなかった印象です。

\*\*\*

終わりに感想めいたことを書きますが、最後の「集団を指揮するリーダーは必要か」というような抽象的な問いはこのままのかたちではなく、もっと具体的な場面に置きいれて考えていく必要を痛感しました。レポートを書きながら、読書会の最中のあの対立はほんとうに対立だったのかますます疑わしくなってきたからです。「対立」が明らかになることは悪いことではないと思いますが、具体的に話していった結果消失するような「みせかけ」の対立で時間と体力を消耗したり、「傷つく」ようなことはできるかぎり避けるべきでしょう。報告の中では書きいれられませんでした。が、「対話」をすると傷つきざるをえないから、日常「対話」を通して意見を調整したり、まとまったりするのは難しいという話がありました。それに対して筆者は、対話のなかで感じられるあの違和感を「傷」と、あるいは「傷つけら

れた」と解釈しないでいられればいいのにと言いましたが、それ以前にみせかけの「対立」を解消することによっても「対話」に対するハードルを下げることができます。今回の課題本に書かれていたことと絡めると、なるべく「対話」のハードルを下げることによって対話を促すこと——これもまた対立を乗り越えて「われわれ」を形成し、ひいては民主主義を再活性化することにつながると言えそうです。

報告：綿引 周（てつがくカフェ@せんだい）

「震災を読み解くために」——参加者による本の紹介（発表順）

○一之瀬正樹著『放射能に立ち向かう哲学』（筑摩書房）

3.11以降、より一層放射能問題が私たちに暗い影を投げ続けています。しかしこの問題は専門性が高く素人だけで議論することは難しく、原子力関連の専門家の意見を仰がなければならない状況が続いていました。そんな中、福島原発の放射能問題（特に低放射線被爆）が人に与える心理的混乱に対して、哲学的視点から考察を与えているのが本書です。

○想田和弘著『日本人は民主主義を捨てたがっているのか？』（岩波ブックレット）

3.11という大災害によって、それまで私たちが直視することを避けてきた日本社会の様々な深刻な問題が露わになりました。原発の危機管理の杜撰さとその非合理性、国民への情報公開や報道の自由が極度に制限されていること、被災者をはじめ社会で弱い立場にある人々の生命や人権の尊重に関わる問題など、今すぐにでも真摯な議論が必要な事柄が多数あります。にもかかわらず、いまだにこの社会には自由にモノが言えないような空気が至る所に充満していて、その一方では、感情のおもむくまま自分と異なる存在や意見を圧殺しようとする言動が野放図に行われていたりもします。ここは本当に民主主義の国？と思っていた時に出会ったのがこの本です。

「観察映画」と呼ぶ手法でドキュメンタリーを撮っている著者の想田和弘氏は、最近の日本社会で起きつつある現象を観察しているうちに、「もしかすると、日本人は民主主義を捨てようとしているのかもしれない」という疑念を抱くようになったそうです。

<はじめに>の中で、想田氏は次のようにも述べています。

<僕の脳内では、民主主義に対する危機を察知するセンサーが作動し、アラーム音が

鳴り始め、その音は止むどころかどんどん大きくなりつつあります。ところが、そのアラーム音が聞こえている人は、どうも日本人のごく一部に限られているようです。のっぴきならない危険が迫っているのに、大部分の人はセンサーが起動せずに平気な顔をしているようにみえるのです。

まさにそのことが理由で、僕は「今までの民主主義だったからといって、これからもそうであり続けるとは限らないのではないか」と本気で考え始めています。＞

もう今までの社会システムだけでは、どうにもならなくなってしまう状況をなんとか打開していくためにも、まったく新しい社会のグラウンドデザインが必要になっていくに、私たちはその議論の端緒にも付けていないのはなぜなのか、事態を変えていくためにはどうしたらよいのかを再考する上で、非常に示唆に富むテキストだと思います。

○若松英輔著「魂にふれる」（トランスビュー）

私たちは、身近な人の死に常に直面している。しかし、今回の大震災では、今まで全く知らなかった人達の死が、身近な思いとなって迫ってきた。私は今回の大震災での死者とは、直接接触はしていない。しかし、近親者、関係者からのお話を聞くにつけて、死者が遠い存在には思えなくなっていた。

そうした時にこの本に接し、「生者」と「死者」との関係を著者は、明治の禅学者である鈴木大拙と、著者自身の妻との悲しみに満ちた別れの場面を通し、死者は日々生者の中で新しい物語を紡ぎ出しているのだとの話に、何の抵抗もなく引き込まれていった。

大震災を経験したこの機会に、是非一読を。

○山本昭宏著『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960: 「被爆の記憶」と「原子力の夢」』（人文書院）

二次大戦の被爆国、日本。核の恐ろしさを身をもって体感した国が、どのようにして原発という核の「平和利用」に賛同 / 夢中になっていったのか。その過程を探る本。

- ・戦後の知識人たちの核エネルギーをめぐる言説
- ・科学者たちの議論
- ・水爆反対運動を始めたとした市民の署名活動と意識の変化
- ・当時の本や映画

・広島における（サークル誌なども含めた）言説

など多様な視点から、戦後から原発稼働までの推移をみることができる。

この中で人々は、次第に核エネルギーの平和利用に納得し、不安を抱き、しかし研究開発が進む過程で人々の関心が薄れていく実態も垣間見えてくる。

現代、わたしたちは、結果論から原発の賛成・反対を唱えるが、物事が進んでいく「うねり」のようなものは、途中段階ではなかなか止められなかっただろうと痛感する。いまだからこそ、それを見渡してみることが意味があるように思う。

○アルベール・カミュ著『シーシュポスの神話』（新潮文庫）

3年前の地震や津波について「なぜあの時・あの場所で起きたのか？」「なぜ私のいるところで／いないところで起きたのか？」と問うことは無意味でしょう。それらの自然現象はまったく偶然的で、あの時間と場所で起きたことに理由も目的もありえません。

とはいえそう問わずにいられないのが人間なのだと震災以降、実感しました。人間はそう問わずにいられないにもかかわらず、世界は全くの無返答を貫き通す——カミュならまさにこの状況を「不条理」と形容したはずです。

題名にもなっている神話のなかでシーシュポスは、神々から罰を科されます（その理由は諸説あるようですが）。その罰の内容は「休みなく岩をころがして、ある山の頂きまで運び上げる」というもの。しかしひとたび山頂に達すると、岩は反対側に転げ落ち、シーシュポスは同じ苦労を死ぬまで繰り返さなければなりません。シーシュポスに科された罰もやはり「不条理」ですが、カミュはこのシーシュポスの運命と人間の運命とを重ねます。

しかし私たちの要求は決して受け入れられず、私たちの人生がシーシュポスに背負わされた罰のごとく不条理なものであったとしたら、「どうして続けなくてはならないのか？」と問わずにいられません。この疑念を極限にまで推し進めるなら結局、自分でこの労苦から解放されるという選択肢、すなわち自殺がもっとも理に適った選択であるように思えます。これが本当にそうなのかを検討するのが、この本でのカミュが第一の目標です。結論を言ってしまうと、《自殺は不条理の帰結ではない》というのがカミュの答えではあるのですが。

この本の内容はたしかに、震災関連自殺などの社会問題にもかかわり、その観点でも皆でカミュの論証を検討することは有意義たりうるかもしれません。しかしそれよりもむしろ、震災後「不条理」という言葉にその時の私の気分が呼応して大好きになったこの本を、今・

ここ仙台で、他のひとたちがどのように読むのか知りたいという単純な思いから今回紹介させて頂いた次第です。